

第9回仙台国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門レポート②

予選 1 日目 2025 年 5 月 24 日 (土)

音楽ジャーナリスト：正木 裕美

以降は、初日の各出場者の熱演について、順を追ってレポートしたい。

サミール・アグラワル（アメリカ）のイザイは情感の繊細な表出（第 1 楽章）やテクニックを駆使した鮮やかさ（第 2 楽章）を持ち合わせ、推進力よりもテンポの振幅を大きく取って自己表現に徹した。その分、ややエキセントリックだったか。モーツァルトのアダージョではトップバッターの重圧を跳ね除け、クリアな音質で調和を見せたが、反面ロンドではテンポの軸がブレてしまい、オーケストラとの齟齬が生じた。

エリック・チェン（アメリカ／台湾）はイザイで音程が微妙に定まらず、技術面でもう一歩的確であれば良かった。モーツァルトのアダージョは音間を埋める豊かな抒情性と柔軟性が一際光った。オーケストラとも美しく調和したが、個人的にはロンドの細かい動きを丁寧に追って欲しかった。

落合真子（日本）は力強い「曙光」（第 1 楽章）を聴かせ、第 2 楽章もよく弾き込んでおり堂々たる演奏ぶりを見せた。モーツァルトではお手本のようにアーティキュレーションを的確に施し、アンサンブルも安定していた。一方で、イザイもモーツァルトも音色に均一な印象を持った。

ユリアン・ヴァルター（オーストリア）のイザイは澄んだ音色でのびやか。技術面には余裕があるように聴こえたが、第 2 楽章終結部では音程の精度よりもデュナーミクが優先されてしまった。モーツァルトはアウフタクト（弱起）、フレーズの始まりや終わりを丁寧に扱い、曲想を表情豊かに歌い上げて、アンサンブルとの阿吽の呼吸に繋がった。それだけに、転調を伴うカデンツアの終止が、合奏へスムーズに繋がらなかったことが残念。

ツアオ・ジャーチェン（中国）は、イザイで悠然とした流れの中に瞬発力を発揮する一方、時折小節単位で推進力が途絶えるのがやや気になった。モーツァルトではオーケストラとの呼吸を合わせて繊細なアンサンブルを奏で、協奏への意識が一際高い。トゥッティになると自身の指揮で音楽の表情づけを行い、作品全体への音楽観を示した。

ザカリー・ブランドン（アメリカ）はイザイで音楽を俯瞰し、装飾的音型や流れの中で聴かせるべき旋律を丁寧に追っていた。一方、ピツィカートでうまく芯を捉えられない場面があり、後半のテーマ再現部以降で一部重音を敢えて弾かなかった。モーツァルトでは豊かな音色を湛え、爽やかにオーケストラと疾走したが、ロンドで一瞬のずれが生じ、オーケストラのフォローを得た。

イ・ジユン（韓国）はイザイで途中譜面を忘れてしまい、またロンドでは容易（たやす）いはずの上行音型で音を外したりと、全体的に粗が目立った。ロンドではとにかく弾ききる体になってしまったのが残念。イザイの闊達なリズム、アダージョの艶やかな音色など、美点もあった。

キム・ヒョンジ（韓国）は弓を大きく使い、シャープな音色でイザイを奏でた。アダージョにおける憂いを湛えた音色は彼女ならではの持ち味だろう。寄せては引いて、緩急豊かな情感を表現し、美しい旋律を響かせた。ロンドでは休符を含む特定の音型で急ぐ傾向にあり、一部でアンサンブルとの一体感に欠けた。